

第2節 原間地区・樋端地区の中期古墳について

原間遺跡と樋端遺跡において古墳時代中期の古墳は原間遺跡で原間3～10号墳の計8基と樋端遺跡で樋端1・2号墳、神越3号墳の計3基を検出した。これらは弥生時代の集落を検出した原間遺跡を挟む東・西側の丘陵上で検出している。東丘陵は主となる丘陵（主丘陵）とそこから派生した支丘陵a（樋端1・2号墳）と支丘陵b（神越3号墳）があり、それぞれで古墳を検出している。これらの古墳の詳細をまとめたものが第3表である。

西丘陵で検出した古墳は原間3・4・7～10号墳で、丘陵頂部・丘陵上傾斜部・丘陵斜面部とその立地が様々である。一方東丘陵の主丘陵で検出した古墳は原間5・6号墳で、これらは丘陵頂部で検出している。また支丘陵a・bで検出した古墳は樋端1・2号墳、神越3号墳で、丘陵頂部や丘陵傾斜面で検出している。

また埋葬施設も木槨・粘土槨木棺墓・土壙墓（箱形木棺）・船底状木棺・箱式石棺と様々で、出土遺物にも規模・時期差によりかなり様相が違うことが解っている。

以下それぞれの項目について簡単にまとめてみたい。

1. 古墳築造順序と築造場所

原間遺跡及び樋端遺跡で検出した中期古墳は11基あり、共伴遺物及び埋葬主体部の状況から前後関係が解る。

時期決定は共伴する須恵器及び土師器の編年を基軸とし、根拠とした。

その結果を基に前後関係をまとめるとこの古墳群のなかで一番古く築造された古墳は原間6号墳で、田辺編年TK216型式併行期、一番新しいものは原間4・9号墳で、田辺編年TK47型式併行期と5世紀前半から後半に形成された古墳群であることが解る。

したがってこの須恵器・土師器による時期決定から原間遺跡・樋端遺跡の古墳群は原間6号墳→原間5号墳→原間3号墳、樋端1・2号墳、神越3号墳→原間4・9号墳→原間10号墳という築造順序となる（第145図）。これ以外の古墳については時期は不明であるが、概ねその立地からTK47型式併行期のものとする。

この築造順序を基に築造場所をみると原間6・5号墳は東丘陵主丘陵のそれぞれの頂部に造られていることが解り、後続する原間3号墳、樋端1・2号墳、神越3号墳は西丘陵及び東丘陵の主丘陵から北東方向に分岐した支丘陵a・b上に造られており、古墳の立地から主丘陵・頂部という要素で明確に区別できる。また墳丘規模においても原間6・5号墳が直径20m以上の円墳に比べて、後続する古墳は直径15m以下の円墳であることにも明確な格差が認められる。

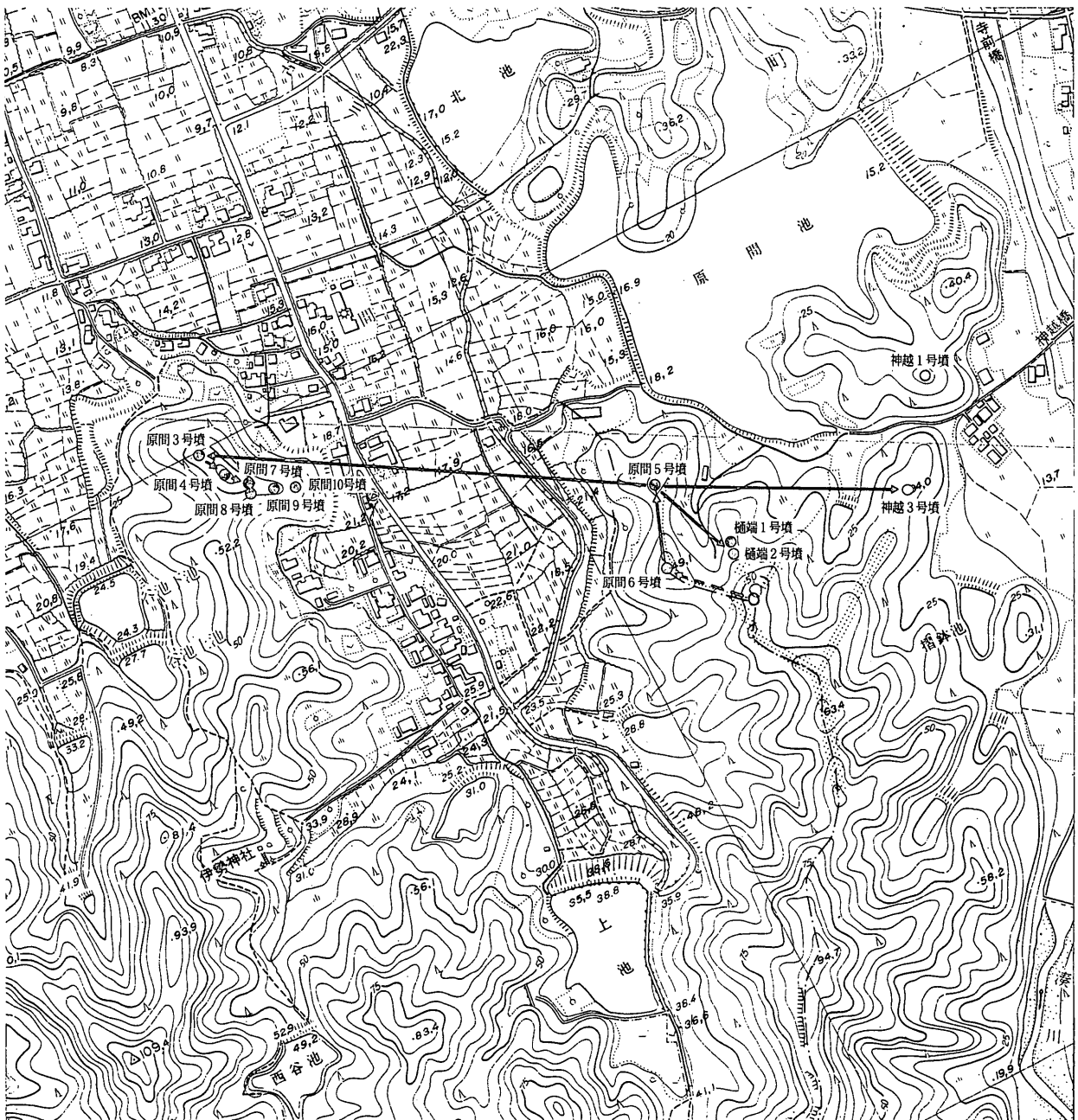
この築造順序は調査区内の現象面でみると第145図に示したように原間6号墳→原間5号墳という首長墓系譜がこれ以降墓域を拡大し、それぞれの丘陵に墓域を構成するということが考えられる。しかし西丘陵に築造された古墳群が別系譜という考え方も可能で一概に判断できない。

東丘陵の主丘陵と支丘陵の関係でみると明らかにTK23型式併行期以降に墓域は拡大し、古墳群を形成するようである。副葬品の格差でみるとおそらく主として丘陵頂部に築造されている古墳主体部に鉄製品が副葬されていることが解り、TK23型式併行期以降に築造された古墳の首長墓が丘陵頂部、それ以外は下位集団の古墳であると考えられる。このことから首長墓系譜は依然丘陵頂部に築造

第3表 原間地区・槇端地区 古墳詳細一覧表

古墳名	丘陵位置	標高	墳丘形状	墳丘規模	葺石	埴輪	埋葬施設	主軸方向	副葬品	共伴須恵器
原間6号墳	東丘陵頂部	48.6m	円墳	30.2m 墳丘高 3.5m	× 墳裾 に列 石	×	木槨	南5° 東西主軸 頭位 東	刀3(棺内)短甲・頸鎧・肩鎧 ・斧・鋤先・刀子(木槨内) 鎌・刀・斧・剣・須恵器・ 土師器(槨外)	TK216
原間5号墳 第1主体部	東丘陵頂部	41.5m	円墳	20.2m	×	×	箱形木槨	北36°	須恵器直口壺(墳丘上)	TK208
原間5号墳 第2主体部							箱形木槨	南31°		
原間3号墳 第1主体部	西丘陵頂部	53.5m	円墳	14.5m	×	×	船底状木槨	南15°(新) 頭位 東	鉈・不明鉄製品(主体部) 須恵器・土師器(周溝)	TK23
原間3号墳 第2主体部							粘土槨木槨墓	南26°(古) 頭位 東		
槇端1号墳	支丘陵a 傾斜面	37.5m	円墳	6.3m	×	×				(TK23)
槇端2号墳	支丘陵a 傾斜面	39.8m	円墳	8.7m	×	×	箱形木槨	南6° 丘陵に直交 頭位 東	刀(主体部)、鎌(主体部上) 鋤先・鎌・ヤス・土師器(周 溝)	TK23
神越3号墳	支丘陵b 頂部	34.5m	円墳	8.54m	×	×	粘土槨木槨墓	南48° 丘陵に直交 頭位 東	鉈・ガラス玉	(TK23)
原間9号墳	西丘陵 傾斜面	45.4m	円墳	8.6m	×	×			須恵器(周溝)	TK47
原間4号墳	西丘陵頂部	54.2m	円墳	13.3m	×	×	箱形木槨	北19° 丘陵に直交 頭位 東	鉄刀・刀子・鉄鏃・ 鏝・須恵器・土師器(周溝)	(TK47)
原間7号墳	西丘陵 傾斜面	50.2m			×	×	箱式石槨	北49° 丘陵に直交 頭位 南西		
原間8号墳	西丘陵 斜面	48.2m			×	×	箱式石槨	北0.5° 丘陵に並行 頭位 東		
原間10号墳	西丘陵頂部	43.5m	楕円形 墳	7.0×9.3 m	×	×	粘土槨木槨墓	北86.5° 丘陵に直交 頭位 北		

※主軸方位については主体部の長軸主軸で、東小口を基準として東方向から北・南へ○°と角度を提示している。



第145図 原間地区・樋端地区中期古墳築造順序

する傾向が読みとれる。

この傾向を他地域でみるとTK208型式併行期の長尾町川上古墳は丘陵先端部に1基単独であり、群集墳を形成しない。しかし寒川町大井七ツ塚古墳群（石井古墳群）、末則古墳群、岡の御堂古墳群などはTK23型式併行期以降の築造で、古墳群を形成することから原間遺跡・樋端遺跡の状況と合致することが解る。つまり5世紀代に出現する初期群集墳はTK23型式併行期以降に造営された古墳群で、この時期に爆発的に墓域・造墓者を拡大し、各地において古墳群が形成されるものとする。

2. 埋葬形態について

各古墳の埋葬形態をみると原間6号墳の主体部が木槨という特異な構造であること以外、土壙＋箱形木棺、粘土槨木棺墓、箱式石棺と原間5号墳以降様々で、特に時期ごとに変化するような規則性は認められない。しかし他地域、特に長尾町川上古墳、綾南町浦山古墳群・岡の御堂古墳をみるとその

ほとんどが竪穴式石槨を主体部に持っており、明確に主体部構造が竪穴式石槨に移行していることが解る。

この点で原間遺跡・樋端遺跡で検出した古墳時代中期の古墳群は特異な様相を呈している。

3. 東西主軸の形骸化

前期古墳においては埋葬主軸方位にかなり厳格に東西方位を守っていることは、先学諸氏によって論じられていることである。

原間古墳群及び樋端古墳群で見ると埋葬主軸方位の東西指向はこの地域でみるとおそらく原間6号墳（TK216型式併行期）まで残るようである。しかし後続する原間5号墳（TK208型式併行期）、原間3号墳（TK23型式併行期）になると徐々に埋葬主軸方位の東西指向が形骸化し、樋端2号墳、神越3号墳、原間4号墳では丘陵に直交する埋葬主軸方位を持つようになる。つまりTK208型式併行期段階で徐々に東西指向が形骸化し始め、続くTK23型式併行期段階で完全な東西主軸という概念は消滅し、丘陵稜線に主体部を直交させる意識が主流となる。

それは川上古墳（TK208型式併行期段階）で埋葬主軸方位の東西指向に形骸化の傾向が認められることもこの結果を裏付けている。

4. 大内町・白鳥町内の中期古墳について

この原間古墳群及び樋端古墳群以外に中期古墳が存在することが確認されている。

まず大内町内では大内町住屋（前山丘陵の西裾部、第146図）から須恵器坏身2点、坏蓋2点、高坏1点、土師器直口壺1点が出土している（第146図）。この資料は昭和初期頃地元土地所有者が発見したもので、開墾中にこの6点が纏まって出土した。おそらく古墳に副葬されていたものと考えられる。

190・191は須恵器坏蓋、192・193は須恵器坏身、194は須恵器高坏である。

190は天井部が平らで、かなり急に屈曲する。天井部と体部の境に突出したシャープな稜を持ち、口縁部は内傾しており、端部には僅かに段を持つ。天井部のヘラ削りは一単位6～7mmの幅で、天井部の8.6割の範囲に施されている。ヘラ削りの方向は順まわり（時計回り）である。天井部内面には横ナデの後不定方向の指ナデが施され、天井部外面には自然釉がかかっている。口径13.0cm、器高4.35cmを測り、かなり扁平な形態である。

191は天井部が平らで、緩やかに体部となる。天井部と体部の境に突出したシャープな稜を持ち、口縁部は内傾しており、端部には僅かに段を持つ。天井部のヘラ削りは一単位6～7mmの幅で、天井部の8.5割の範囲に施されている。ヘラ削りの方向は順まわり（時計回り）である。口径13.1cm、器高4.6cmを測り、やや天井部の高い形態である。器壁はかなり薄く作られている。

192は底部が平らで、蓋受け部はやや上方に延び、シャープに仕上げられている。立ち上がりは高く、やや内傾し、口縁端部には僅かに段を持つ。底部のヘラ削りは一単位6～9mmの幅で、天井部の8.4割の範囲に施されている。ヘラ削りの方向は順まわり（時計回り）である。口径11.3cm、受け部径13.5cm、器高4.8cmを測り、やや扁平な形態である。器壁はかなり薄く作られ、底部には自然釉がかかっている。おそらく190とセットになるものと考えられる。

193は底部が平らで、蓋受け部はやや上方に延び、シャープに仕上げられている。立ち上がりは高



第146図 大内町白鳥町内中期古墳位置図

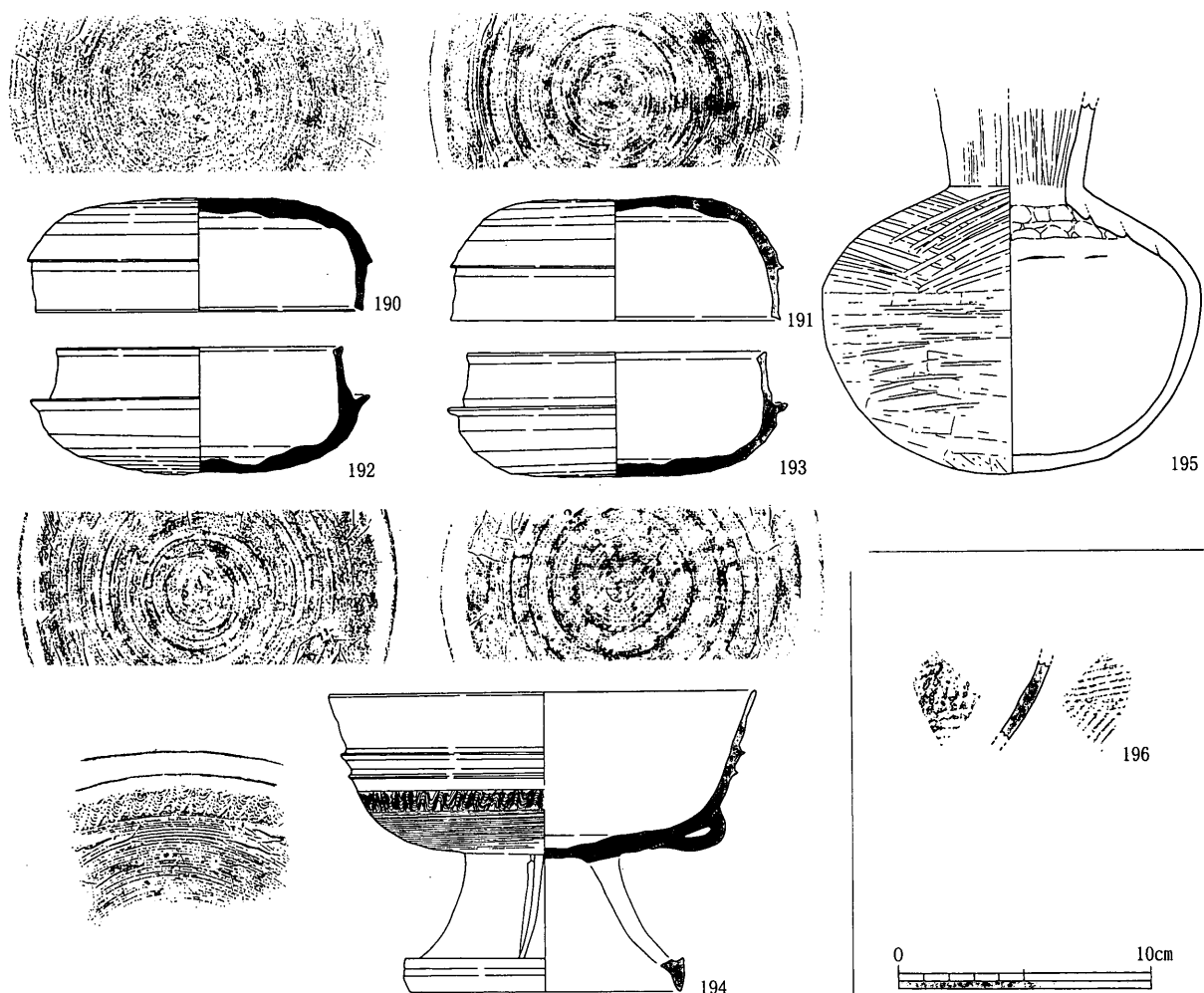
- | | | |
|--------------------|---------|---------------|
| ①190～195(遺物番号)出土位置 | ⑥原間8号墳 | ⑪原間2号墳 |
| ②196(遺物番号)出土位置 | ⑦原間9号墳 | ⑫原間2号墳 |
| ③原間3号墳 | ⑧原間10号墳 | ⑬原間1号墳 |
| ④原間4号墳 | ⑨原間6号墳 | ⑭原間3号墳 |
| ⑤原間7号墳 | ⑩原間1号墳 | ⑮原間遺跡(古墳時代中期) |

く、やや内傾し、口縁端部には僅かに段を持つ。底部のヘラ削りは一単位6～10mmの幅で、天井部の8.3割の範囲に施されている。ヘラ削りの方向は順まわり（時計回り）である。口径11.9cm、受け部径13.55cm、器高4.8cmを測り、かなり扁平な形態である。器壁はかなり薄く作られている。おそらく191とセットになるものと考えられる。

194は須恵器無蓋高坏で、かなり坏部の深いもので、底部と体部の境に屈曲部を持つ。体部は直線的に外上方に延び、ほぼ中央にシャープな突帯を2条持つ。体部から口縁部にかけて薄く作られており、口縁端部は丸く仕上げる。下段の突帯下に上部を横ナデ、下部をカキ目によって消されているが、明瞭で、細かい櫛描波状文が施されている。耳状把手は一方のみで、上部が波状文帯にかかるもので、かなり下方に貼付されている。脚部は緩やかに広がり、端部を上下に拡張する。透かしは長方形の四方透かしで、脚部外面の透かし際を面取りするという特徴がある。口径16.9cm、坏部高6.4cm、器高11.6cm、底径10.8cmを測る。

195は土師器直口壺で、頸部は直線的に外上方に延びる。体部はやや肩の張る形態で、底部に僅かに平底を持つ。頸部内外面には縦方向のヘラ磨きが、体部上半には分割のヘラ磨きが、下半にはヘラ削りの後粗いヘラ磨きが施されている。胎土は精良である。頸部径が5.3cmとかなり狭い。

これらの須恵器・土師器は同時期と考えられ、須恵器坏身・坏蓋の形態や無蓋高坏の耳状把手の位



第147図 大内町 前山丘陵・白鳥町内出土遺物実測図(1/3)

置および脚部の透かしの特徴からON46型式併行期である。

これらの資料は確実に墳墓に伴う資料とはいえないが、所有者からの聞き取りやこれらの土器に伴い鉄製品が出土していることから古墳の可能性が考えられる。この資料が古墳出土であれば原間・樋端古墳群内でも原間5号墳（TK208型式併行期）より若干古く位置付けられ、原間・樋端古墳群と同様な古墳群が前山周辺に営まれていたことを窺わせ、今後重要な資料となる。

次に白鳥町内では表採資料であるが、須恵器壺の体部片がある。この資料は白鳥町帰来にある独立低丘陵の斜面部で表採したもので、おそらくこの丘陵に古墳がある可能性を窺わせるものである。

196は須恵器壺の体部片で、体部外面には3～4mm幅の細かい平行叩きが施され、内面には磨り消されているが、同心円状の当具痕が僅かに認められる。

時期は壺体部小片のために明確には判断できないが、おそらく5世紀後半～末（TK23～47型式併行期）頃のものと考えられる。

一方これらの古墳を造営した集団の居住地が平成13年度の原間遺跡の発掘調査によって検出された（第146図）。

原間遺跡は現在まで平成9・10年度に四国横断自動車道建設に伴い発掘調査を実施した横断道原間遺跡、平成9・11年度に大内白鳥インター線建設に伴い発掘調査を実施した県道原間遺跡があり、平

成13年度に実施した県道原間遺跡を含めると合計4回目となる。この4回の発掘調査から原間遺跡の概要が解る。

まず横断道原間遺跡の調査によって弥生時代から近世の集落を検出し、特に弥生時代では主として微高地上に中心小集落が展開することが解り、時期は弥生時代後期後半から終末にかけてで、継続して集落が営まれていることが判明した。また集落構成の最小単位である単位集落（家族）が約60mの範囲内で、竪穴住居2～3棟、掘立柱建物1棟、土壇墓等で構成されていることが判明した。さらに原間遺跡弥生集落の範囲は平成9年度に実施された県道原間遺跡でほとんど弥生時代の遺構を検出していないことから概ね北限を確認し、横断道の予備調査で居住域に対する生産域（水田？）を推定した。また微高地復元段階で原間遺跡弥生集落の中心部分を推定したが、予想通り平成11・13年県道原間遺跡の発掘調査でその中心部分を確定する結果となった。この中心集落で検出した遺構の時期は弥生時代後期後半から古墳時代初頭、古墳時代中期・後期、古代と横断道原間遺跡で検出した遺構の時期幅より広いということからも解る。

今回ここで報告するのは古墳時代中期の遺構についてである。古墳時代中期は原間遺跡の西丘陵・東丘陵上に古墳が築造される時期で、今回の調査まで古墳の築造者の集落が確認されてなかったのが、今回の調査で判明したことになる。

検出された遺構は平成13年度県道原間遺跡調査区のほぼ中央部分、微地形復元で確認した微高地の最高所に当たる部分で、竪穴住居を1棟検出している。ここでは竪穴住居SH07について報告する。

SH07は北部を水田高低差により削平を受けているものの平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は東西4.78m、南北推4.05m、検出面からの深さ18cmを測る。北辺部分が削平を受けているために竈の有無は確認できないが、中央部に炉の痕跡が確認されていないこと南東コーナー部で検出した土坑内から甔が出土していることからおそらく北辺部分に竈を持っていたものと推定できる。主柱穴は4穴と考えられ、その内3穴を検出している。南北主軸は真北より21.5°西偏する。

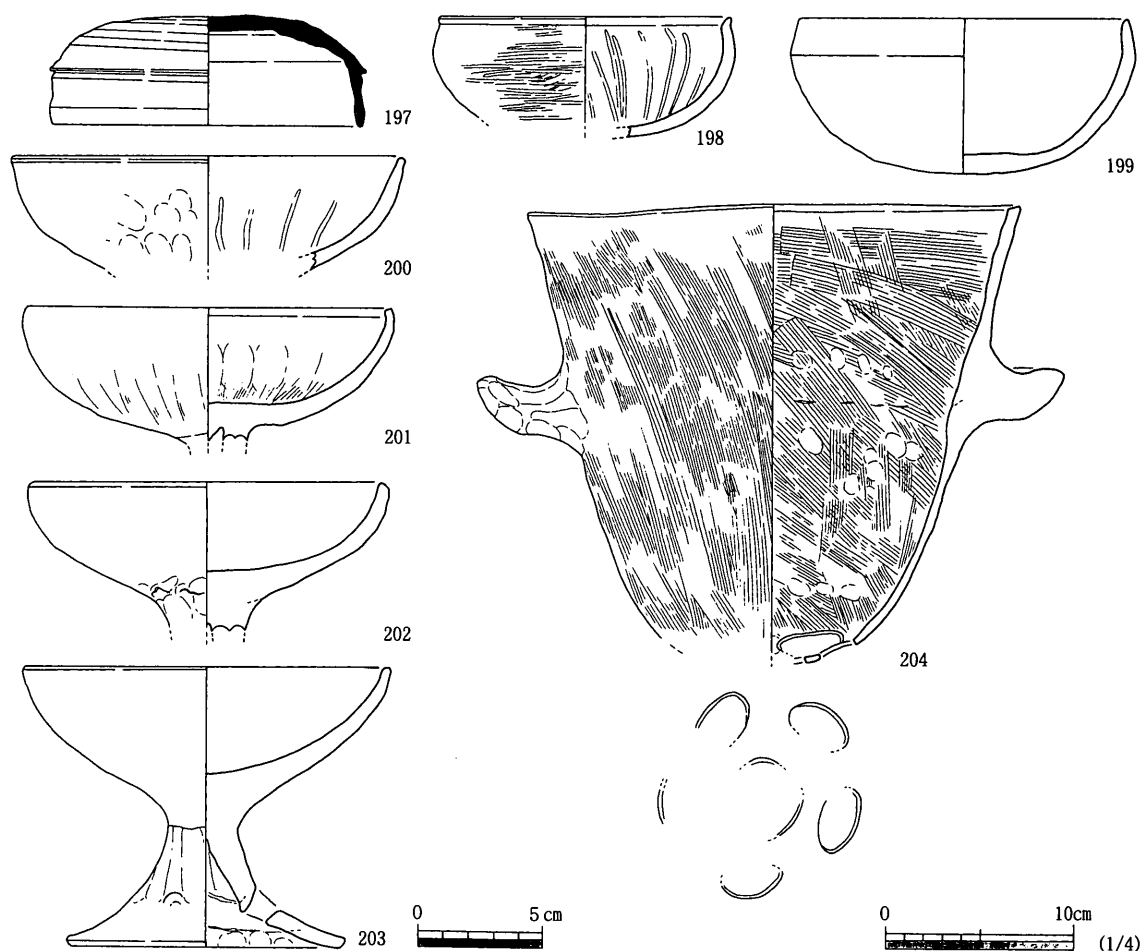
遺物は床面直上から土師器碗・高坏が出土し、土坑内から須恵器坏蓋・土師質土器甔が出土している。検出状況は竪穴住居内周囲（壁際）に土師器碗・高坏が出土するという状況を呈していた。

これらの遺物の内図化したのは以下の8点である（第148図）。

197は須恵器坏蓋で、口径12.2cm、器高4.2cmを測る。平らな天井部から緩やかに屈曲し、体部に到る。天井部と体部の境には鋭く突出した稜を持つ。口縁端部は稜を持たず、四角く終わらせる。天井部外面には5～10mm程度のヘラ削りを丁寧にし、天井部に占める範囲も広い。このヘラ削りは中心がずれており、丁寧さの中にも粗略化の傾向が認められる。ヘラ削りは逆時計回転である。天井部内面は横ナデの後不定方向の指ナデが施されている。天井部外面には前面及び体部の一部まで濃緑色の自然釉がかかっている。焼成は硬質である。

この須恵器坏蓋は天井部と体部の境の鋭く突出した稜や天井部に施されたヘラ削り単位が細かいことなどから、TK208～23型式併行期と考えられ、時期は5世紀後～末である。

198は土師器碗で、口径11.2cm、器高推4.6cmを測る。内湾する体部から口縁部に到り、端部は外方に短く屈曲する。口縁端部内面には面を持ち、体部との境には明瞭な稜を持つ。体部外面には横方向のヘラ削りの後、横方向のヘラ磨きが施され、口縁部外面には横ナデの後体部同様ヘラ磨きが施されている。体部内面には横ナデの後内底面から口縁部方向に放射状のヘラ磨きがやや粗く施されている。色調は淡い黄褐色を呈し、胎土は0.5～2.0mm程度の石英・長石粒を含む。



第148図 県道原間遺跡(H13)出土遺物実測図(1/3)

199は土師器碗で、口径12.7cm、器高推6.0cmを測る。内湾する体部から口縁部に到り、やや内方に屈曲する。底部は湾曲するが、内底面は平坦である。口縁部内外面は横ナデが施され、それ以外は指ナデが施されている。内外面にヘラ磨き等は認められない。色調は褐茶色を呈し、胎土は0.5～1.0mm程度の石英・長石粒を含む。

200は土師器高坏で、口径15.3cmを測る。坏部下及び脚部は欠損しているため不明である。高坏坏部は直線的に延びる下半から内湾しながら口縁部に到り、端部は小さく外反気味に丸く終わらせる。体部外面には指頭痕が僅かにみられ、後に指ナデが施されている。内外面に幅2mm程度の放射状のヘラ磨きがかなり間隔をあけ、粗く施されている。色調は茶褐色を呈し、胎土は細かい石英・長石粒を含む。

201は土師器高坏で、口径14.4cm、器高(坏部)4.5cmを測る。脚部は欠損しているため不明であるが、高坏坏部は内湾する体部から口縁部に到り、やや内湾する。口縁端部はやや内傾する面を持ち、内側を僅かに膨らませる。体部外面には縦方向の板ナデが施され、体部内面には縦方向の指ナデの後板ナデが施されている。内外面にヘラ磨き等は認められない。色調は明褐茶色を呈し、胎土は0.5～1.0mm程度の石英・長石粒、細かい金雲母を含む。

202は土師器高坏で、口径13.6cm、器高(坏部)約4.3cmを測る。脚部は欠損しているため不明であ

る。高坏坏部は直線的に延びる下半から内湾気味に口縁部に到る。口縁端部は外傾し、面を持つ。坏部内外面は指ナデが施され、内面は板ナデが施されており、ヘラ磨き等は認められない。色調は淡黄褐茶色を呈し、胎土は0.5～2.0mm程度の石英・長石粒を含む。

203は土師器高坏で、口径14.4cm、器高10.7cm（坏部5.7cm、脚部5.0cm）、底径11.0cmを測る。脚部は「ハ」字状に緩やかに広がり、脚部ほぼ中央の3方向に穿孔が認められる。高坏坏部はやや直線気味に体部から口縁部に到り、端部はやや内湾する。口縁端部は丸く収め、内側を僅かに膨らませる。坏部内外面は摩滅しているが、ヘラ磨き等は認められない。脚部外面には縦方向の板ナデが施され、内面には粘土紐の接合痕が顕著に認められる。色調は淡黄褐茶色を呈し、胎土は0.5mm以下の細砂粒の石英・長石粒を含む。

204は土師質土器甑で、口縁部が両側の取っ手方向に広い楕円形状を呈しているために、最大で口径25.8cm、最小で22.5cm、器高約23.7cmを測る。体部は上方に開き、口縁端部は内傾する面を持つ。体部中位やや上側の左右対称になる位置に上方に湾曲する取っ手が付く。底部は丸く収められ、中心部分に隅丸方形（円形）状の透かしを中心に、周りに楕円形状の5つの透かしが認められる。体部外面にはやや斜め方向の刷毛目が施され、内面にはかなり斜め方向の刷毛目が施されている。

これらの遺物は竪穴住居SH07から出土しており、時期は須恵器坏蓋の特徴からTK23形式併行期、5世紀末頃と考える。またその他の器種は土師器碗・高坏、土師質土器甑が出土している。特に高坏は坏部が碗形のもので、かなり器高の浅いものや体部が直線的になっている。

須恵器には若干の幅を持たせたが、土師器高坏をみるとTK208形式併行期の須恵器が出土している川上古墳出土土師器高坏をみると坏部は依然深く、体部は内湾を呈していることから、川上古墳出土土師器高坏よりは後出するものと考え。したがってこの竪穴住居の時期はTK23型式併行期と考える。

以上のように大内町・白鳥町内から古墳時代中期の土器が確認されていることから、かなり古墳時代中期の遺構（古墳）が所在するものと考えられる。また原間・樋端古墳群も調査区外にも所在する可能性があることから、香川県内でも最大規模の古墳群であることが解り、また前山周辺にも同様な古墳群が点在した可能性が指摘できる。特に原間・樋端古墳群と同様に古墳群形成初期段階から古墳群が形成されていたことは注目できる。

また平成13年度の原間遺跡の調査により、造墓集団の居住域が確認されたことは、居住域と墓域の位置的な関係を理解するのに重要なものとなる。この原間遺跡で検出した竪穴住居居住者は位置的な関係から原間古墳群の造墓集団居住域と考えられる。

ここでは出土遺物の紹介を主として、あまり両町の古墳群の意義について論じることはできなかったが、今後の検討資料としては重要な資料と考える。